

[成果情報名]福岡県におけるカキ「秋王」の収穫適期

[要約]カキ「秋王」は、福岡県において開花盛期から収穫始期までの登熟日数が165日に当たる11月1日頃から収穫を開始できる。収穫盛期までの登熟日数は172日程度であり、サクサクとした食感が維持できる11月21日までが収穫適期である。

[キーワード]秋王、カキ、新品種、収穫適期、食感、登熟日数

[担当]果樹部・果樹育種チーム

[連絡先]092-922-4946

[研究所名]福岡県農林業総合試験場

[分類]普及成果情報

[背景・ねらい]

福岡県で育成したカキ新品種「秋王」は大果・高糖度で食味が優れており、産地への導入が進んでいる。果皮色、果肉硬度、糖度から総合的に判断して収穫を実施しているが、収穫適期の目安が確立されていないため、食感の悪い果実の混入が出荷・販売上の問題となっている。

そこで、「秋王」の収穫適期を設定するため、収穫時期別の果皮色、糖度等の果実諸形質の特性を調査し、開花盛期からの登熟日数を明らかにする。

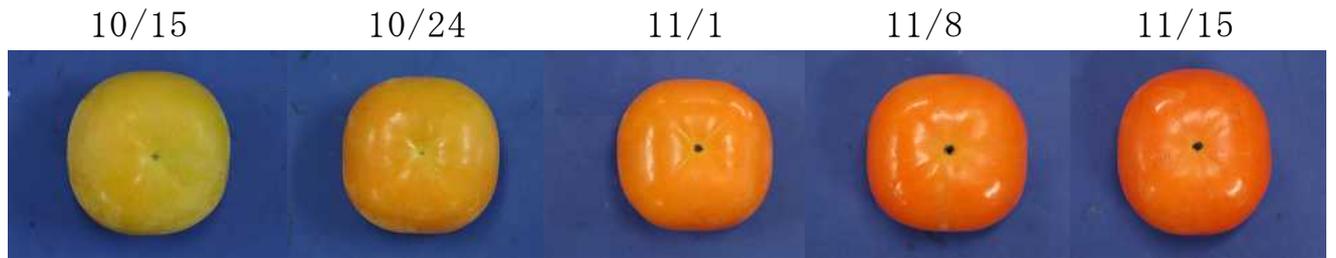
[成果の内容・特徴]

1. 「秋王」果実は10月中旬から11月中旬にかけて経時的に果皮色、果実重、糖度が上昇するのに対し、果肉硬度は低下する(図1)。
2. 「秋王」の収穫の目安となる果皮色が5程度、果肉硬度が1.4kg以下、糖度が17以上に達するのは、開花盛期から収穫始期までの登熟日数が165日に当たる11月1日以降である(図1、表1)。
3. 開花盛期から収穫盛期までの登熟日数は172日である。11月下旬以降に収穫した果実は果肉硬度が1.0kg未満となり、サクサク感が少ない(図1、表1)。
4. 「秋王」の軟化までの日数は、11月1日～11月21日に収穫した果実では16～26日であるが、この前後に収穫した果実では短く、10月21日収穫では6日、11月30日収穫では9日と短い(表2)。
5. 果実外観および食味、軟化までの日数から、「秋王」の品種特性が発揮される収穫適期は11月1日～11月21日の期間内にある(図1、表1、表2)。

[普及のための参考情報]

1. 普及対象：福岡県のカキ生産者。
2. 普及予定地域・普及予定面積・普及台数等：福岡県のカキ産地。
3. その他：「秋王」の果実特性は福岡県筑紫野市の調査データから判定した。
適期前に着色が進んだ「秋王」は、異常成熟である可能性が高く軟化しやすい。

[具体的データ]



果皮色 : 3.0±0.4	果皮色 : 4.2±0.4	果皮色 : 4.6±0.6	果皮色 : 5.0±0.4	果皮色 : 5.4±0.4
果実重 : 299 g	果実重 : 332 g	果実重 : 342 g	果実重 : 352 g	果実重 : 360 g
果肉硬度 : 1.6kg	果肉硬度 : 1.4kg	果肉硬度 : 1.4kg	果肉硬度 : 1.3kg	果肉硬度 : 1.3kg
糖度 : 15.8	糖度 : 17.2	糖度 : 17.6	糖度 : 17.7	糖度 : 18.1

図1 「秋王」果実特性の経時的変化 (2016年) 注)果皮色は果頂部カラーチャート値

表1 「秋王」の生育特性 (2014~2016年)

年次	開花盛期 (月/日)	収穫始期 (登熟日数)	収穫盛期 (登熟日数)	果皮色 (果頂部)	果実重 (g)	果肉硬度 (kg)	糖度 (Brix)
2014年	5/21	10/30 (162)	11/ 6 (169)	5.5	371	1.1	16.4
2015年	5/18	11/ 2 (168)	11/ 9 (175)	6.0	458	1.0	17.1
2016年	5/19	11/ 2 (167)	11/ 8 (173)	5.0	337	1.3	17.6
平均	5/19	11/ 1 (165)	11/ 8 (172)	5.5	389	1.1	17.0
富有 (参考)	5/19	11/10 (174)	11/17 (181)	6.6	310	1.7	16.7

- 注) 1. 果皮色 (果頂部カラーチャート値)、果実重、果肉硬度、糖度は収穫盛期のデータ
 2. 「秋王」の樹齢は2016年で9年生、「富有 (樹齢35年~37年)」は2014年~2016年の平均値

表2 「秋王」果実の軟化までの日数 (2016年)

収穫日	軟化までの日数
10月21日	6.1
11月 1日	16.3
11月11日	25.5
11月21日	20.5
11月30日	9.1

- 注) 1. 各収穫日とも果頂部がカラーチャート値5の果実を供試
 2. 室温下で保存し、指で押してへこむ状態を軟化までの日数とした
 (福岡県農林業総合試験場)

[その他]

研究課題名 : カキ新品種「秋王」の早期成園化および結実安定技術の開発
 予算区分 : その他
 研究期間 : 2014~2016年度
 研究担当者 : 白石美樹夫、朝隈英昭
 発表論文等 :